厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業
平成22年度　分担研究報告書

板橋区医師会におけるがん患者支援に関する研究

研究分担者　田城孝雄　順天堂大学医学部公衆衛生学講座　准教授

研究要旨
がん診療を行う医療機関は、医師会など関係団体等と協力していくことが望ましいとされている。板橋区医師会は、がん診療の地域医療連携のシステムを構築するために、在宅診療研修会、病院部会研修会、地域医療研修会、板橋区医師会医学会、在宅療養ネットワーク懇話会を開催している。さらに、板橋区民まつりにおいて、がんを含む医療に関して啓発活動を行い、また区民に対してアンケート調査を行っている。

A．研究目的

「がん対策の推進に関する意見交換会」の提言には、がん診療を行う医療機関は、地域連携クリティカルパスの整備など、切れ目のない医療の提供を実現すべきであること、医師会など関係団体等と協力していくことが望ましいとされている。がん診療連携拠点病院と地域の医療機関との連携体制のあり方を提示するために、地区医師会におけるがん患者支援のあり方を検討する。

B．研究方法

東京都２３区の中で、地区医師会を中心とした地域医療連携体制の構築の進んでいる板橋区医師会および板橋区の地域医療連携体制に着目し、板橋区をフィールドに文献的考察と、聞き取り調査、参与観察調査を行った。

C．研究結果

板橋区と板橋区医師会は、乳がんの保健・医療・福祉の幅広い連携を支援するため、共同で行政と医師会役員、病院の専門医と医療連携専門家からなる「乳がんの地域連携パスを考える会」を設置した。さらに、医師会の会長・役員が加わった「板橋区の乳がんを考える会」を設置し、医療機関間の機能分担や連携の仕組みの構築を図り、計7回の地域連携クリティカルパスの検討会板橋区の乳がんを考える会を開催した。病院機能調査・各種のアンケートにより、意向調査や情報交換を行い、医師会員の共通認識を高め、乳がんの医療連携体制構築の意識が醸成された。
また、板橋区医師会は、地域医療連携のシステムを構築するために、在宅診療研修会、病院部会研修会、地域医療研修会、板橋区医師会医学会、在宅療養ネットワーク懇話会を開催している。さらに、板橋区民まつりにおいて、がんを含む医療に関して啓発活動を行い、また区民に対してアンケート調査を行っている。

D．考察

『板橋区私のブレストケア手帳』は、がん診療連携拠点病院で乳がんの治療を行った後、地域で患者のフォローアップや療養支援を行う診療所と、がん診療連携拠点病院との連携を行うために開発された。乳がんの治療を行った患者さんで、高血圧症、高脂血症などの疾患を持っている人の生活管理・療養管理を補助するためのツールであり、板橋区医師会と板橋区内複数がん診療連携拠点病院（２大学病院）および公立・公的病院、行政（板橋区・保健所）との３年余の議論による成果物である。平成22年度改正の診療報酬にて、がん治療連携計画策定料・がん治療連携指導料が認められ、がん患者の退院後の治療をあらかじめ作成・共有された計画に基づき連携して行うとともに、適切に情報交換を行うことが評価された。板橋区医師会と、板橋区内のがん診療連携拠点病院が、乳がん診療の医療連携ネットワークを構築し、がん患者支援に資する。

E．結論

板橋区医師会は、板橋区がん診療ネットワークを構築して、板橋区民への丁寧な説明と連携への誘導を行っている。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

板橋区における乳がん地域連携クリティカルパスネットワークの構築
第69回日本公衆衛生学会総会（2010年10月27日から29日　開催）

H．知的財産権の出願・登録状況
1．特許の取得
　　なし
2．実用新案登録
　　なし
3．その他

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業
平成22年度　分担研究報告書

石川県能登地区におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究

研究分担者　元雄良治　金沢医科大学　腫瘍内科学教授

研究要旨
本研究の目的は、金沢医科大学病院が担当している石川県能登地区のがん医療の現状と問題点を把握し、能登地区がん診療連携協議会などを通して、地域の医療機関との連携を強化し、自立支援型がん情報の評価と普及を通して地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの構築を図ることである。

A．研究目的

金沢医科大学病院が担当している石川県能登地区は、住民の高齢化・独居老人の増加・医療機関へのアクセス不足・がん専門医の不足などの問題点を抱えている。これは能登半島という地理的要因が絡んでおり、全国にも似た状況の半島地区がある。また看護師などの医療スタッフの不足も深刻である。本研究では、能登地区におけるがん医療の現状と問題点を把握し、金沢医科大学病院（当院）が主催している能登地区がん診療連携協議会や当院がん看護専門看護師が中心に開催している能登地区看護師セミナーなどを通して、地域の医療機関との連携を強化し、自立支援型がん情報の評価と普及を図ることを目的とした。今年度はまず地域ネットワークの構築に向けた取り組みを把握し、実施することを主眼にした。

B．研究方法

医師および看護師がそれぞれ中心になって開催している能登地区がん診療連携協議会を振り返り、今後の方向性を探った。

（倫理面への配慮）
特に必要としなかった。

C．研究結果

平成22年度能登地区がん診療連携協議会は能登空港ターミナルビル内生涯学習センター能登分室講義室にて9月25日午後3時～4時に開催された。今回が通算で6回目であった。参加医療機関は13病院、参加者数は41名で、内訳は医師14名、看護師12名、事務・その他15名であった。協議会は病院長や部長などのがん診療責任者、看護部長、事務局長、などの参加が原則であった。毎回恒例の病院紹介では、公立宇出津総合病院の小森和俊院長から現在のがん医療の取り組みが紹介された。同院は奥能登地区の基幹病院であり、筆者も1年間内科医長として勤務した病院だけに、内容がよく理解できた。院長をはじめ消化器外科医が中心になってがん患者の診断・治療・緩和ケアに従事している。化学療法も大学病院と連携している。ただ高齢者が多く、化学療法は有害事象をいかに少なくするかに重点がおかれるとのことであった。現在その南に位置する公立穴水総合病院と金沢医科大学病院とで実施している遠隔医療を、公立宇出津総合病院でも取り入れる意向のあることが述べられた。次に地域連携クリティカルパスおよび診療報酬の改訂を筆者が紹介した。特に本年4月に新規に導入された「がん治療連携計画策定料」や「がん治療連携指導料」について説明した。最後に平成22年5月に金沢医科大学病院にて開催された、石川県医師を対象とした緩和ケア研修会について当院麻酔科の土田英昭教授から紹介された。
第28回がん診療連携拠点病院研修会は午後4時から5時まで行われ、50名の出席者があった（内訳は看護師23名、医師13名、事務・その他14名）。講師は国立がん研究センターがん情報センター室長の渡邊清高先生で、「がん患者必携（冊子）のご紹介と情報提供・相談支援についてのご意見交換」と題した講演があった（司会：筆者）。前半はがん情報の重要性や地域連携のこと、後半は「患者必携」の取り組みが紹介された。

D．考察

能登地区がん診療連携協議会は平成19年度より毎年2回（3月、9月）に能登中部・北部の病院・診療所・医師会が参加する協議会であり、各病院の現状、国レベル・県レベルの最新の情報を共有している。またそのあとに研修会を開催し、がん医療専門の医師・看護師に講演

を頂いてきた。回数を重ねるごとに、知り合いが増え、顔の見える地域連携につながっていることを実感する。

外来化学療法を主にしているわれわれの診療部門では「自己管理ノート」を患者さんに携帯させており、これに「患者必携」を併用する場合にはどのような情報が必要か、検討を要する。

E．結論

石川県能登地区では金沢医科大学病院との密接な医療連携を取っており、今後「患者必携」を用いた自立支援型がん情報の評価と普及が期待される。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

1) 元雄 良治. 経営者のための健康管理術 第5回: がんに向き合うために知っておきたい～がんの新常識と最先端治療～. 學都(42): 54-55, 2011.
2) 津谷 喜一郎, 元雄 良治, 中山 健夫. CONSORT 2010 声明 ランダム化並行群間比較試験報告のための最新版ガイドライン. Jpn Pharmacol Ther（薬理と治療）vol. 38(11): 939-949, LIFE SCIENCE PUBLISHING, 東京, 2010.
3) 元雄 良治. がん治療とこころの関係 集学的がん治療とは. 現代のエスプリ: がん患者のこころ, 517: 157-161, 2010.

2．学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

1．特許の取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

Kanazawa Medical University Hospital
金沢医科大学病院 がん診療連携拠点病院

Noto Cancer Network
（奥能登・能登エリアをカバー）

第6回 能登地区 がん診療連携協議会

会場 能登空港ターミナルビル内 TEL：(0768) 26-2360
生涯学習センター能登分室講義室A・B

2010 9/25(土) 15:00～15:50

・公立宇出津総合病院におけるがん医療への取り組み
・地域医療連携クリティカルパスの事例
・石川県医師に対する緩和ケア研修会について
・次回開催日程の確認　他

15:50～17:00
・第28回がん診療連携拠点病院研修会

[再掲]

第28回 がん診療連携拠点病院 研修会

後援／石川県医師会・石川県看護協会・河北郡市医師会
羽咋郡市医師会・七尾市医師会・能登北部医師会
石川県薬剤師会

9/25(土) 15:50～

会場 能登空港内　生涯学習センター能登分室講義室A・B

【特別講演】

― 患者さんが安心して治療を受けることができるナビゲーション ―

がん患者必携（冊子）のご紹介と
情報提供・相談支援についてのご意見交換

<講師> ●渡邊 清高（わたなべ きよたか）先生
国立がん研究センターがん対策情報センター

―― 問い合わせ ――

資料等の準備もありますので,参加人数がわかるようでしたら，予定人数をお知らせください。

21世紀集学的医療センター TEL 076-286-3511 内線 5231/5234
E-mail center21@kanazawa-med.ac.jp FAX 076-218-8448

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業
平成22年度　分担研究報告書

地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立－倉敷での活動－

研究分担者　山口佳之　川崎医科大学　臨床腫瘍学教授

研究要旨
岡山県倉敷地域での地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立に向け、緩和ケアフォーラムin岡山という組織を立ち上げ、顔の見える関係づくりに着手している。今回、国、県、地域、病院、患者団体よりそれぞれの活動について意見交換し、地域市民に対する情報提供を市民公開講座として実施した。それぞれの立場における活動が明らかとなるとともに、それらをいかに有機的につなげるか、また、情報とともに実診療をいかに患者にとどけるか、今後の課題が明らかとなった。

A．研究目的

がん患者および家族の不安を払拭し、治療・療養・ケアの切れ目ない提供を確保するためには、地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立が急務である。われわれは、2007年8月に緩和ケアフォーラムin岡山という組織を立ち上げ、地域がん診療連携拠点病院を中心に、地域の中核病院、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーションの参加を得、症例検討と教育講演を実施しながら、地域における顔の見える関係づくりに着手している。今回、市民公開講座を開催し、国、県、地域、病院、および患者団体よりそれぞれの活動について意見交換し、地域市民に対してそれぞれの活動の情報提供を実施した。

B．研究方法

2011.01.15土曜日13:30～16:00、川崎医科大学メディカルミュージアムにおいて、市民公開講座「みんなでつくろう、地域で支えよう、がん患者さんの支援の輪～がん「患者必携」岡山の取り組みに向けて～」を実施した(添付1)。同時に、会についてアンケート調査を実施した(添付2)。

C．研究結果

130名の参加を得た。

まず、基調講演として厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)「地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究班」班長である国立がん研究センターがん対策情報センター渡邊清高先生より、「地域社会でのがん患者支援」をご講演いただいた。がんになっても、これさえあれば安心という一冊「患者必携」を国として整備する試みが報告され、全国に普及しつつあることが示された。

続いてパネルディスカッションが開始された。まず岡山県のがん対策について、岡山県医療推進課副参事前原幹子先生より現状報告をいただいた。岡山県では毎年約1万人の方ががんにかかり、年間5000人の方ががんで亡くなられ、死亡原因の第1位である。今年度から、がん患者支援情報サイトとして県のホームページ「岡山がんサポート情報」を開設し、相談支援センターや患者団体の紹介コーナーなど、がんに関する各種情報を提供する活動が報告された。

倉敷地域での活動として、倉敷第一病院 診療部長竹内龍三先生より、地域一体型緩和ケアネットワークの確立に向けた活動報告があった。「緩和ケアフォーラムin岡山」という研究会を設立し、顔の見える関係づくり、「地域で診る、地域で看る」体制づくりの報告があった。

川崎医科大学附属病院の活動として、呼吸器外科部長中田昌男先生から、地域連携パスとがんサロンの報告があった。地域連携パスでは、同じ情報を患者・がん専門病院・地域のかかりつけ医の3者が共有することで、地域医療の絆を強くすることができる。両者それぞれの強みを生かしながら途切れのない診療が可能となって、安心な医療の提供につながる。また、がんサロンは、がん患者や家族と医療従事者が一堂に会して悩みや体験を語り合い、情報交換を通じて癒やしの効果が得られるとともに、患者同士ならびに患者と医療従事者の絆が一層深まることが報告された。

最後に、NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会理事長松本陽子先生より、患者としてできる活動報告があった。おれんじの会は、「交流」「学び」そして「社会へ向けての情報発信」を3つの柱に活動している患者団体である。『家族必携』では、患者を支えた経験者が後に続く人のために“知っておきたい情報”および“心構

え"が小冊子にまとめられ、家族のつらさ、不安に寄り添うことが主眼となっている。がんの治療は医療者に委ねるしかないが、周辺の不安や負担は、地域社会のさまざまな立場の人たちの知恵と工夫で軽減できることが協調された。

以上を受けて、総合討論として、それぞれの立場における活動が明らかとなるとともに、それらをいかに有機的につなげるか、今後の課題となった。また、医療費や利用できる医療資源情報などをいかに利用していただくかという問題がクローズアップされた。

アンケートは、130 名中 55 名より回収された(回収率 42.3%)。男性 17 名、女性 38 名。内容に関し、役に立った 28 名、大変役に立った 20 名、計 48 名 87.3%より高い評価を受けた。

D．考察

国、県、地域、病院、および患者団体それぞれの立場における活動が明らかとなるとともに、それらをいかに有機的につなげ、意味あるものとするにはどうすればいいか、今後の課題と考えられる。アンケートの意見欄に見るように、それぞれの活動を初めて知ったなどの意見が数多く寄せられた事実は、われわれの活動がいかに知られていないか、ということを浮き彫りとしている。

以上より、目的とした「情報提供」の役割は果たせたと評価できる一方で、医療情報をいかに患者および家族にお届けするか、今後の課題が明らかとなった。

E．結論

地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立に向け、地域医療機関の顔の見える関係づくりが重要であり、国および県の支援が不可欠である。同時に、これらの活動の地域市民に対する情報提供の在り方整備が必要である。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

がんセンターニュース(投稿中)

2．学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

1．特許の取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

（添付１）

共催　厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究班
地域がん診療連携拠点病院　川崎医科大学附属病院がんセンター

参加者数
１３０名

第８回　市民公開講座

「みんなでつくろう、地域で支えよう、がん患者さんの支援の輪」

～がん「患者必携」岡山の取り組みに向けて～

日　時：平成２３年１月１５日（土）13:30～16:00
会　場：川崎医科大学　現代医学教育博物館　２階大講堂

挨　拶　　川崎医科大学附属病院　院長　角田　司　先生

＜□基調講演＞

地域社会でのがん患者支援

司会　川崎医科大学附属病院　臨床腫瘍科　部長　山口　佳之　先生

「みんなでつくる、地域で支える、がん患者さんの支援の輪を広げるために」
国立がん研究センターがん対策情報センター
（厚生労働省研究班　研究代表者）　渡邊　清高　先生

質問用紙　回収

＜□パネルディスカッション＞

司会　国立がん研究センターがん対策情報センター
（厚生労働省研究班　研究代表者）　渡邊　清高　先生
川崎医科大学附属病院　臨床腫瘍科　部長　山口　佳之　先生

１．「岡山県のがん対策」　岡山県医療推進課　副参事　前原　幹子　先生

２．「地域一体型緩和ケアネットワークの確立に向けて」
緩和ケアフォーラム in 岡山
倉敷第一病院　診療部長　竹内　龍三　先生

３．「がんサロンと地域連携パス」
川崎医科大学附属病院　呼吸器外科　部長　中田　昌男　先生

４．「がん患者からのメッセージ　～がんになっても安心して暮らせる街をめざして～」
NPO 法人愛媛がんサポートおれんじの会　理事長　松本　陽子　先生

＜□総合討論＞

第8回 市民公開講座

みんなでつくろう、地域で支えよう、がん患者さんの支援の輪

～がん「患者必携」岡山の取り組みに向けて～

日時 平成23年1月15日(土) 13:30～16:00

場所 川崎医科大学　現代医学教育博物館　2階大講堂

入場無料（事前申込不要）

Ⅰ.基調講演

地域社会でのがん患者支援

司会　山口　佳之 先生
川崎医科大学附属病院　臨床腫瘍科　部長

「みんなでつくる、地域で支える、がん患者さんの支援の輪を広げるために」

国立がん研究センターがん対策情報センター（厚生労働省研究班　研究代表者）　渡邊　清高 先生

Ⅱ.パネルディスカッション

司会
国立がん研究センターがん対策情報センター（厚生労働省研究班　研究代表者）　渡邊　清高 先生
川崎医科大学附属病院　臨床腫瘍科　部長　山口　佳之 先生

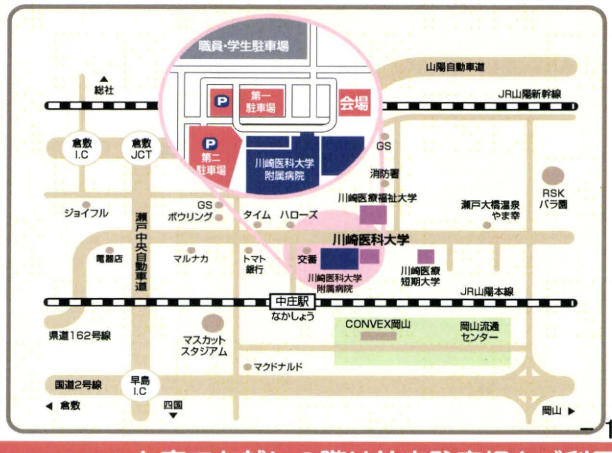
1. 岡山県のがん対策
岡山県医療推進課　副参事　前原　幹子 先生

2. 地域一体型緩和ケアネットワークの確立に向けて
緩和ケアフォーラムin岡山・倉敷第一病院　診療部長　竹内　龍三 先生

3. がんサロンと地域連携パス
川崎医科大学附属病院　呼吸器外科　部長　中田　昌男 先生

4. がん患者からのメッセージ ～がんになっても安心して暮らせる街をめざして～
NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会　理事長　松本　陽子 先生

Ⅲ.総合討論



お問い合わせ先

川崎医科大学附属病院　病院庶務課
倉敷市松島577
TEL（086）464－1164

共　催

川崎医科大学附属病院（地域がん診療連携拠点病院）
厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）
地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究班

後　援

岡山県・倉敷市・岡山県医師会・倉敷市連合医師会・
岡山県看護協会・岡山県薬剤師会・岡山県社会福祉協議会

お車でお越しの際は外来駐車場をご利用ください（受付にて無料券をお渡しします）

第８回市民公開講座（平成２３年１月１５日開催）
「みんなでつくろう、地域で支えよう、がん患者さん支援の輪　がん「患者必携」岡山の取り組みに向けて」

アンケート用紙　集計結果

参加者数１３０名中５５名回答　　回答率　４２．３％

１．　性　別　　男（１７名）　・　女（３８名）

２．　年　齢　　２０歳代（　５名）　３０歳代（　５名）　４０歳代（　４名）
５０歳代（１７名）　６０歳代（１０名）　７０歳代（１３名）
８０歳代（　１名）

３．　ご住所　　倉敷市（２８名）　岡山市（１５名）　総社市（　４名）
笠岡市（　１名）　赤磐市（　１名）　都窪郡（　２名）
久米郡（　２名）　明石市（　１名）　鳥取市（　１名）

４．　本日の講座を何でお知りになりましたか。（複数回答）

病院の掲示板・ちらし（２３名）　病院のホームページ　（２名）　知人（４名）
折込広告（１４名）　山陽新聞（７名）　朝日新聞（１名）　日本経済新聞（１名）
その他　がん情報サービス（１名）　岡山ＭＳＷ会誌（１名）　倉敷公民館（１名）
職場に届いた（医療関係に勤務）川崎医大 FAX NEWS を見て（２名）
岡山県がん診療連携拠点病院のＨＰを見て（１名）
患者会から送付されたちらしを見て（１名）　病院からの案内（２名）

５．　講演会の「内容」について

①全く役に立たなかった（０名）　②あまり役に立たなかった（０名）　③普通（７名）
④役に立った（２８名）　⑤大変に役に立った（２０名）

＜ご意見・ご感想＞

- 講演の中では「がん患者からのメッセージ」が良かったです。がん患者にとって良い先生（医師）と良い薬に出会えて、精神的援助（家族・医師）、経済的援助が完全であれば最高だと思います。国や県に求めるのは、経済的援助の確立です。
- 自分だけがと思っていたが、たくさんの方々が病気になっていることが分かった。全国、地域のあらゆる場所でフォーラムがあり、相談ヶ所があるので、いつでもどこでも悩みを聞いてもらえることになったことについて少し安心できた。私は川大に通院している身なのでここの病院ですべて診てもらえると思うとありがたいです。
- 地域連携パスのことがよくわかって良かった。家族ががんにかかって亡くなりましたが、これからも経験するであろう事なので“がんに立ち向かう勇気といまを生きる勇気”という気持ちを持って毎日、毎日、１日、１日を大切にして生きていきたいと思います。

- 竹内先生が地道な活動をされている事を知り、感心しました。
- 松本先生の語り口の上手さに感心しました。努力されていることが手にとるようにわかりました。
- 「がん情報サービス」のＨＰを見てみようと思った。
- がんとは何か？がんのメカニズム・・を知りたかったが、今回のテーマではないので残念でした。
- 地域連携パスはとても興味深く聞かせていただきました。
- 各講師の方の更に詳しいレジメ（ＰＣの画像）がいただきたかったです。メモしても全部は聞き取れなく残念でした。
- 先生と患者との関係づくりが大変大事だと再認識しました。
- 先生、患者とのコミュニケーション。話のやりとりによって知り得ない情報も知ること、聞くことの大事さ！！患者も一歩踏み出さなければ闘えないと思いました。与えていただけるものもですが（今も状況では)、待っているばかりではダメなのだと思いました。
- 国よりも県よりも患者会の活動が１番ひびきました。おれんじの会、すばらしいと思いました。
- 愛媛の患者会の多方面にわたるエネルギッシュな活動は、がん患者に対する視野を広げ、参考になりました。お金のこと、ＭＳＷの利用、患者必携、参考にしたいです。
- 新しく知ったこと、知ってはいたけどあまり詳しくなかったことなど聴くことができ勉強になりました。
- 医療者や役所の方の話は難しく感じる。良いことを話していると思うが・・と感じる。
- 時間配分が悪い。予定を過ぎている。少し期待はずれでした。
- 「がん情報サービス」などネットで知る情報が増えました。がん対策、がん支援、緩和等勉強ができました。再発し、１年以上の治療が続いています。医療費補助は利用していますが、年額にしたらかなりの金額になります。どうにかならないかな？
- 中田先生が言われたように、情報をどのように伝えるのか、必要な患者さんに必要な情報を伝えるにはやはり間に入る人が要るのではないでしょうか。その役割を担えるのはナースだと思います。どの患者さんがどのような情報を必要とされているかニーズを把握していないと伝えられません。その点をナースがもっと認識することが大切だと思います。忙しい現場の中でも取り組めることがあると思います。松本先生が言われたように地味だけどシステムづくり、体制づくりがポイントではないでしょうか。
- 今までの生活と考え方を見直します。自分で工夫をして病気と上手につきあい、努力をしたいと思いました。
- がん患者にとってはよく分かる内容だった。これをがん患者になる前に知っていれば、告知直後に味わった、うつ状態のようにならなくても済んだかもしれない。
- 今日の講座に参加して、国・県ががんについて様々な取り組みをしていることが分かった。しかし、私自身１年程前にがん告知を受けた際、何一つ今日の内容を医師・看護師等から聞くことはなかった。拠点病院で治療を受けたにもかかわらず・・・。がん告知から治療までは時間がないため、先生の方から病名、治療方法などの説明と同時に「がん患者必携」へ掲載されているような情報も教えてもらいたかったと思う。
- ホームページ・冊子等様々な情報を得ることは可能である。その多くの情報の中からどれを選択すれば良いのか、何が自分に合っているのか等のアドバイス、実際の人の声が聞ける場を今後増やしていって欲しいと思います。
- 誰でもがんにかかる可能性はあるので、知っておいて損はないです。
- がんに対する医療の取り組みに感心した。
- 愛媛の会の話は大変興味深いものでした。
- 松本陽子先生の医療費の話は役立つように思う。
- 現在がんにかかっていませんが、毎日心配していることが心の中でほっとした様に思います。
- 最新の取り組みを知ることが出来て大変良かったです。冊子体で準備されているので大いに利用できると思います。同病の友人・知人に勧めたい。またインターネットの活用も出来る状況を知った。こういう情報公開の機会はありがたかった。
- これまで県外の緩和医療に関する講演や勉強会に参加することが多かったのですが、近くで数多くこのような会が行われていることがうれしく思いました。またこれからも岡山にいてもいろんな情報が得られること、こういう場が増えることを期待しています。また多くの人に情報発信さ

れること、情報をキャッチしやすい仕組みであることをお願いしたいです。
- 各機関（がん研究センター・県・病院等）それぞれの取り組み、情報を知ることが出来て、とても貴重な機会でした。このような場が定期的にあればいいなと思いました。本当に良い講座でした。
- 特に最後の松本先生の講演がすばらしかった。心に響きました。これからのがん相談支援に今日の話を生かしていきたい。（鳥取のがん相談支援員）
- 国・県・地域の取り組みを分かりやすくお話いただき、勉強になりました。おれんじの会での発表で、がん患者さんの考え、苦悩を学び、愛媛県での取り組みの早さに感銘しました。盛りだくさんすぎておなかいっぱいです。いろいろな取り組みがあるなかで、我々に届いてきている情報はほんの一部にしかすぎないことを学びました。
- さまざまな角度からのお話をお聴きして参考になりました。
- 今日はとても寒かったので、会場が寒いのでは・・と心配していたが、きちんと暖房設備がされていて嬉しく思った。迎え入れる姿勢がきちんとなされていました。緩和ケア、医療のネットワークの取り組みが分かりやすかった。ただ行政的に長期入院が難しいのは残念に感じる。社会的に１人暮らしで、治療後退院に関して不安を覚えている患者が多い。その人たちが安心して地域に帰れるように、行政の方でも考えてもらえたらいいのでは・・。
- 制度・システムについて、また現時点での県南西部の状況がよく理解できた。またお願いします。
- ２人に１人が発症する疾患で誰もが病気になる世の中である。故に情報が重要であると思いました。が、残念なことに死亡率がまだ高い・・・低くなれば・・・。いろいろな情報があることを知り、大変ためになりました。ありがとうございました。
- 講演会に参加して大変勉強になった。新しい情報はたくさんあるのに、なかなか一般の人には届いていない気がする。（インターネットで情報提供が多くされているが、できれば毎日テレビで流してほしい。１０分でもいいので。岡山県の情報番組として（ニュースではなく）。）個人ももっと勉強しなければいけないと思った。ただ今だに病院間の連携がなかなか進んでいないんだなと感じた。病院でがんと告知された時、また、余命宣告をされたとき、相談センターや支援センターにわざわざ相談に行くより、まずその病院で話を聞いてくれる、相談できる場が欲しい。あれば誰に聞けばいいのか教えてほしい。病院では医者でも看護師でも・・と言われるが、実際のところ皆忙しすぎて、難しい。
- 私自身がんではありませんが、もしがんになった場合は安心して治療が受けられると思う。
- 年寄り二人暮らしでインターネットなどないので今日のような講座をたびたびしていただきたいと思います。
- 他の病院にかかっていますが、このような機会は全くないのでよい勉強になりました。
- 「ソーシャルワーカーへ相談する」ことを知りましたが、お金のことは大切ですが、口に出しにくく「手術」となったら医師・看護師さんからこの由を一言言っていただきたい。みなさん知りません。今日はありがとうございました。昨年も講座へ何度も参加させていただきました。今年も出席させていただきます。
- 本日は参加させていただいて、新しく知った事があったのはありがたいことです。倉敷にも緩和ケア病棟、緩和医療に取り組んでくださっている先生・病院があることは心強いことです。地域連携パスが他のがんにも早く作成されることをお願いいたします。がん患者、家族、がんという病気等、いろいろな冊子が作成されるのはとてもありがたいことですが、どういう形で、どこで手に入れたらいいのか分かりません。新聞等でもお知らせいただけるとありがたいです。インターネットを見ない者ですので、私は病院のコーナーに置いてあるものをいただいています。

６．　講演会で、新しく知った点や興味深く感じた点があればお聞かせください。

- 県の対策として「がん」に対して取り組んでいることを初めて知った。
- 「患者必携」の冊子については今回の講座で初めて知りました。活用していきたい。（６名）
- 緩和ケア病棟。
- おれんじの会　－　医療関係者への教育を行っていること。（２名）

- がん情報サービス。分かりやすい確かな情報。（３名）
- おれんじの会の講演が１番心にしみた。今は治療中であるが、元気で仕事が出来ている自分は幸せ。行政が作成している県共通パスのことは初めて知った。早く全てのがんについて作成されることを願う。
- おれんじの会の活動。医療に対する知識がお有りだから・・だけとは思えませんでした。患者会の果たす使命感をしっかり持たれて積極的に進めておられ、立派です。
- クリニカルパスが患者自身の役立つものになるために（保存・保管・新情報 up など）工夫は必要かなと思います。
- 倉敷第一病院に緩和病棟があることを知って心強く思った。けれど３ヶ月で転院をせまられるのは急性期病院と同じかな？と心配。
- 緩和ケアについてもっと知りたい。（２名）
- メディカルソーシャルワーカーのこと。
- 支援センターの活動。
- 倉敷での緩和ケアフォーラムの存在。
- 患者必携・緩和ケアフォーラム・おれんじの会、これらのことについて今回知ることができ、自分の身の回りのことに役立てていけると思った。
- 積極的な患者団体のパワー！！
- 岡山県内で５大がんのクリティカルパスが作成間近であった点。
- 緩和ケアフォーラムが今後患者さんも入った会になる際に、どのようなお題で開催されるのか興味あり。
- 私の療養手帳。
- 現行の法・システムがよく解りました。
- 地域連携パス：１９９９年　父が肝がんになった時にはこういった制度はなかった。
- がんサロン：上記と同様。家族内で悩み、外部のがん患者との情報交換はなかった。
- ＰＣでインターネット使用にて情報が得られ分かりやすくされていることを知った。地域の病院との連携も知り、心強く感じました。
- 「地域連携パス」というのを初めて知った。今では本人または家族が、がんばって別々の医者にかかっていたところがある。早くすべての病院で利用できるようにしてほしい。ただ利用できる患者に制限があるのがおかしい。全ての医療機関でネットワークができれば患者制限などなくなるのではないか？
- がん患者の方は医療はもとより地域の支えがあってこそ心の安らぎが出来ると思った。
- 地域連携パスの出来具合と今後の方向についての情報。
- 相補療法。
- がん地域連携パス。
- 患者側からも扉を叩いてみることが大事ということを竹内先生に伺って、実行してみようと思いました。気持ちがほぐれました。
- 中田先生のおっしゃった患者まで届く情報に共感しました。
- 岡山県、個人の先生方の取り組みを大変ありがたく感じました。

７．講演会で、もっと詳しく知りたかった点や深く議論したかった点がありましたらお聞かせください。

- 「がん連携協議会」がシステムのキーステーションかと思いますが、患者１人ひとり、家族等の生の問題状況の把握とその解決策の改善が図られることが肝心だと思います。そのあたりの具合と取り組みについて検討していただければ良いと思っています。
- 地域一体型緩和ネットワークが本当に大切だと思う。ひとつの病院ですべてを診ようとするのではなく病院間の垣根が取れれば患者側にとって治療がもっとやりやすくなると思う。確立されたものでなくてもいいので、各市町村で小さくてもいいので「ここととここの病院は連携がありますよ」というのが知りたい。
- 遠隔地に住む家族が、がん患者の場合のコミュニケーション。テレビ電話の設置など。残り少な

い人生における家族との密なコミュニケーション。

- ここで書くことではないかもしれませんが・・・比較的長く療養できる方はサロンや患者会への参加もしていけると思います。数ヶ月の余命宣告を受けた際は目の前の看病のことでいっぱいになり、家族としてそのような会への参加を思いつきませんでした。拠点病院でなくても何か紹介してもらえるといいと思います。
- 家族にがんの告知はしたものの余命は伝えませんでした。でも本人は気付いていたと思います。家族として本人に対してどのような声掛けをすればよかったのだろうと思うことがあります。そのような面で気を付けることなどがあれば知りたいです。
- ５大がんにおける各拠点病院での現在の最新治療についてと中小病院との連携の実態について。
- 緩和ケアの実態。
- 患者必携の実運用の話。いつの間に有料という話になったの？
- 「必ず情報を届ける」ということが本当に課題だと思います。有効な良い情報をどれだけ多くの人に知っていただくか、それによってがんにかかる人、亡くなる人が減るのではないかと思いました。今後このことについて様々な立場の人から意見を聞いて、取り組んでいく必要があるのではないでしょうか。
- 次回は、がん拠点病院の実態、緩和医療施設についての情報・取り組みについて、がん患者会・がんサロンの活動について、もっと聞きたいです。
- がん患者からのメッセージ。
- 再発患者の在宅診療に取り組んでいる医療機関をもっと増やすには？
- がんサロンと地域連携パス。
- 岡山県のがん対策。具体的な対策がよく分からない。
- それぞれのがん検診の内容と費用について。
- 抗がん剤のことについて、保険がきくか、脱毛が防げるか等の情報が欲しかった。
- 副作用について。（２名）
- がんになったら医療費が高いといわれていますが、何で値段が違うのか？何百万の治療を受けて助かるのか？重症の病人でも三ヶ月で退院しなければならないのか？

８．「岡山県版　地域の療養情報」に取り入れてほしい情報やテーマなどありましたら、こちらにお書きください。

- がん患者会はどのようなものがあるのか情報がほしい（一覧表でよい）。がん告知～手術まで、手術後、治療中、いろいろ聞きたいことがあるとき、話ができる会を知っていたらそこへ行ってみたかったと思った。同じ患者ならでは分かり合えることがあるので。
- 治療方法を選択するときのヒント。決めるのは自分だが、何をどう考えて選べばよいのか分からず悩んだ。
- いろいろな医療に対して難しいことが多い。分かりやすく記してほしいし、見やすくしてほしい。県・地域で温度差があるように感じてしまう。岡山はなぜか冷たいように感じてしまう。がんだけでなく、多くの情報を発信してほしい。
- 緩和ケアが可能な訪問看護ステーションの情報が知りたい。
- 医療費・社会保障制度のこと。それぞれの地区・独自の制度について取り入れてほしい。
- 治してもらうという姿勢ではがんはなかなか治りません。生活と考え方を見直し、自分で工夫して、病気と上手につきあう努力をすることが大切です。自分で病気を治すという気持ちを忘れずに自分が努力を続けることが病気を治すには大切です。患者が治療に参加し活き活きと過ごすことが大切で分かりやすい確かな情報が必要。
- 県の立場からも、もう少しがん患者の気持ちを考えて本気で活動してほしい。このような会を県内全ての拠点病院で受けられるように県のほうからも活動してほしい。
- 地域の療養情報を早く作ってほしい。
- 質問内容とは違いますが・・・〇〇先生の講演で気になることが一点あります。発表の言葉ですが、度々「患者」と発言していましたが、原稿は「患者」と記してあっても、発表は「患者さん」

と敬称であってほしかったです。聞いていて・・・・苦しい。会場には医療従事者だけでなく、多くの患者さんもおられたと思う。果たしてその方々はイヤな思いをされてないでしょうか？

- 各種がんの検診・治療・緩和ケアを受けるにはどの医療機関に行けばいいのか。各医療機関の特徴など（緩和ケア病棟がある病院など）。
- 鳥取でも我々（鳥取のがん相談支援員）が中心になって、岡山に負けないように「地域の療養情報」の早期整備を行いたい。
- ＭＳＷの有無、緩和ケア病棟（個々の詳しい内容。個室料金なども含む）の一覧、緩和ケア対応、往診をしている医療機関、訪問看護ステーション（どこまでの医療行為・地域が対応可能か）、患者会の一覧、専門医（どこの病院のどの先生がどのがんの専門か）がわかるもの。（２名）
- １つの番組としてがんの最新情報をとりあげるものよいが、ＴＶコマーシャルで定期的にがん情報を流してほしい。
- 地域のニーズ。地方公共団体。岡山県におけるがん対策をしっかりとしてほしい。

９．現在または過去に、ご自身、ご家族や周囲にがんにかかっている方はいらっしゃいますか。

（複数回答）

- □ いる（４７名）
  - ▶1．現在、自分ががんにかかっている（９名）
  - ▶2．過去に、自分ががんにかかっていた（８名）
  - ▶3．現在、家族にがんにかかっている人がいる（１１名）
  - ▶4．過去に、家族にがんにかかっている人がいた（２８名）
  - ▶5．家族ではないが、現在、周囲にがんにかかっている人がいる（２１名）
  - ▶6．家族ではないが、過去に、周囲にがんにかかっている人がいた（１４名）
  - ▶7．自分や家族などが、がんではないかと疑っている（５名）
- □ いない（８名）

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業
平成22年度　分担研究報告書

讃岐地区における情報提供を中心とした患者支援法の研究

研究分担者　川上公宏　香川県立中央病院　血液内科部長

研究要旨
香川県は地理的に恵まれており、他県に比較して通院要する時間は多くを要さない。そのため各がん診療拠点病院は診療連携をあまり必要とせず、病診連携は重視されてこなかった。しかし香川県（讃岐地区）のがん患者および家族にも連続的な治療・ケアを提供することは、この地区のがん診療を行う上で必須である。医療連携パスを中心として香川県がん診療連携協議会を中心にして地域診療情報（香川県版）を作成する事となり、患者必携の配布と合わせて全県一区を目指した連携した患者支援を展開する事を目指している。

A．研究目的

香川県内のがん診療情報を把握して理解しやすい情報として提供する事を目指す。

B．研究方法

① 香川県内のがん診療情報を冊子およびインターネット上のホームページでの提供を行う。
② 各がん拠点病院が有する患者会の横断する合同患者会を通じて提供する。
③ 各がん拠点病院でがん患者に、各担当医やがんサロンの役割を担う部門から情報を提供する。

C．研究結果

① 香川県版がん診療情報の作成
先行研究の愛媛県版をもとに香川県版を作成中で現在第3版を作成して最終確認をしている。確認が終われば冊子体として香川県から提供するための印刷を行う予定。また同様の内容を香川県がん診療協議会のホームページにアップロードする準備中。
② 患者会への働きかけ
ピアカウンセリングの会や各がん患者の会に参加して患者必携とこれから完成する香川県診療情報の紹介を行った。
③ 各がん拠点病院での働きかけ
地域がん診療情報の冊子が完成すれば、がん拠点病院およびその他の医療機関より患者および家族に配布を予定している。配布の方法は各医療機関で決定する事としている。またがん患者サロンでも入手できる方法を検討中。

D．考察

まだ成果物としての地域がん診療情報の冊子は完成しておらず、配布の情報のみが先行している状態。来年度に結果が検討できる事が予想される。

E．結論

がん診療の情報提供は必須であり、その中に地方の情報が含まれる事はさらに重要であると考える。地域情報（香川県版）の完成とそれの有用性をアンケート等を用いて検討する事が必要である。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表
なし

2．学会発表
なし

H．知的財産権の出願・登録状況

1．特許の取得
なし
2．実用新案登録
なし
3．その他

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業
平成22年度　分担研究報告書

—患者必携「地域の療養情報（広島県版）」としての「がん患者さんのための『地域の医療情報』サポートブック」の作成のあり方に関する研究—

研究分担者　篠崎勝則　県立広島病院　臨床腫瘍科主任部長

研究要旨
広島県は、がんによる死亡者の減少やがん検診率向上によるがんの早期発見を目標として、「がん対策日本一」を目指している。平成21年10月策定の広島県がん対策推進計画「アクションプラン」は、①がん予防、②がん検診、③がん医療、④緩和ケア、⑤情報提供・相談支援、⑥がん登録の6つの柱から構成される。がん対策関連情報提供手段として「広島がんネット」が平成21年4月に開設されたが、インターネットの利用の有無に関わらず、得られる情報に差が生じないように、必要な情報を冊子としてとりまとめ配布する事も必要である。広島県版「地域の医療情報」の作成においては、がんと診断された患者及びその家族を対象とし、医療や療養生活に役立つ広島県の制度や身近な相談窓口などの情報を一括して提供することを目的とし、患者必携「がんになったら手にとるガイド」や「わたしの療養手帳」と併せて利用されることを前提として作業を進めた。先行5県の「地域の療養情報」を参考とし、基本的には①がんに関する相談窓口，②医療に関する情報（医療と介護）、③医療費・療養生活に関する情報、④支え合いの場、⑤情報の入手方法、⑥広島県の取組みといった6のコンテンツから構成した。原案は広島がんネットの掲載情報を用いて広島県で作成された。広島県がん対策推進協議会・がん患者支援部会、広島県内のがん診療連携病院にある相談支援センターならびに患者団体（支援団体）の意見を聴き、反映させるべく修正を加えた。結果として、他県の「地域の療養情報」の情報に加えて、広島県が取り組んでいるがん医療ネットワークの紹介や支え合いの場として患者団体、患者支援団体やサロンや闘病記コーナーのある図書館などの情報も盛り込まれた。今後は、広島県版「がん患者さんのための『地域の医療情報』サポートブック」の配布を開始するが、利用者・医療者双方に対してその目的・活用方法等についての啓発活動やアンケート調査の実施も必要と考える。

A．研究目的

がんと診断された患者の思いに寄り添い、支えることを目指して、信頼できる情報をわかりやすく、役に立つものとして、患者必携「がんになったら手にとるガイド」（以下：患者必携）が作成され、国立がん研究センターがん対策情報センターのホームページ上で公開されている。そもそも患者必携は、すべてのがん患者について、インターネットの利用の有無に関わらず、得られる情報に差が生じないように、必要な情報を冊子としてとりまとめ配布する事を目的としたものであり、これは国のがん対策推進基本計画の「相談支援及び情報提供」分野における個別目標に位置付けられた。また、患者さんが療養を続けていく上で自身の診療内容を把握するための冊子「わたしの療養手帳」の試作版も作成された。さらには地域のがん医療情報を集約した「地域の療養情報」の試作版が、愛媛県、栃木県、茨城県、静岡県、沖縄県の5県で完成し、これら3種の情報が、がん医療における患者さんの療養生活の質の向上に必要と考えられる。

平成21年10月に策定された広島県がん対策推進計画「アクションプラン」では、①がん予防、②がん検診、③がん医療、④緩和ケア、⑤情報提供・相談支援、⑥がん登録の6つの柱から構成されている。その中で、情報提供に関しては「広島がんネット」が、平成21年4月に開設されている。

広島県のがん対策の各種取り組みやその成果に関するがん患者・家族等の意向実態を把握する目的で実施されたがん患者（支援）団体アンケート調査（平成21年8月実施）では、「広島がんネットで県内のがんに関するイベント情報や拠点病院の診療情報を公表しているが、がん患者・家族の方が必要とする情報が掲載されていますか」といった質問で、「よくわからない」といった回答が全体の6割以上であり、また「よく分からない」理由としては、「ホームページが使える環境にない」、「高齢者には難しい」、「新聞で知るぐらいで、よく広報されていない」といった意見が大半を占めた。

患者が住み慣れた家庭や地域での療養を選択できるように、がん患者・家族の方が必要と

する広島県の医療情報を伝える新たな媒体が必要であると考えられる。がんと診断された患者及びその家族を対象とし、医療や療養生活に役立つ広島県の制度や身近な相談窓口などの情報を一括して提供することを目的とした、広島県版「地域の医療情報」としての「がん患者さんのための「地域の医療情報」サポートブック」を作成した。

B．研究方法

広島県のがん患者・家族が必要とするがんに関する情報とはどのようなものか、またそれら医療情報誌の作成や情報提供のあり方等について、広島県として取り組んでいく場合の活動の場を検討した。次いで、広島県がん対策推進協議会の中のがん患者支援部会にオブザーバーとして参加し、広島県版「地域の医療情報」の作成支援を行った。

C．研究結果

1．広島県版「地域の医療情報」としての「がん患者さんのための「地域の医療情報」サポートブック」の作成に至るまでの経緯

広島県版「地域の医療情報」の作成の必要性と作成の場について、広島県地域保健対策協議会のがん医療均てん化推進ワーキンググループの知人に相談し、広島県がん対策推進協議会・がん患者支援部会が妥当であると助言を賜った。さらに広島県を紹介された。平成 21 年 10 月策定の広島県がん対策推進計画「アクションプラン」に盛り込まれている情報提供に関しては、がん対策基本法にあるように、インターネットの利用の有無に関わらず、得られる情報に差が生じないように、必要な情報を冊子としてとりまとめ配布する事が必要との認識で一致し、平成 22 年度広島県の予算の中に組み込まれた。

広島県版「地域の医療情報」においては、がんと診断された患者及びその家族を対象とし、医療や療養生活に役立つ広島県の制度や身近な相談窓口などの情報を一括して提供することを目的に、患者必携やわたしの療養手帳と併せて利用されることを前提として作成にかかった。原案は広島県健康福祉局保健医療部医療政策課で作成され、コンテンツには先行した5県の「地域の療養情報」を参考とし、基本的には広島がんネットの掲載情報が用いられた。私は平成 22 年度広島県がん対策推進協議会・がん患者支援部会（以下、がん患者支援部会）のオブザーバーとして第 1 回（平成 22 年 9 月 13 日）、第 2 回（平成 22 年 11 月 22 日）に参加し、作成支援を行った（資料１）。部会に先立ち、原案に対し患者支援部会の委員へアンケートが実施され、部会席上で論議の上修正が加えられた（資料２）。最終段階では広島県内のがん診療連携病院にある相談支援センター及び患者団体（支援団体）から意見が聴取され、反映された（資料３）。

D．考察

県民ががんについての情報を必要とした時、県内のがん診療連携拠点病院の「がん相談支援センター」や患者支援団体では提供情報が行われている。今回それらの情報に関して冊子「がん患者さんのための『地域の医療情報』サポートブック（患者必携　地域の医療情報広島版）」を作成したことで、有用な情報が発信されるようになることが期待される。ただ、最新情報の掲載には冊子媒体であるが故に改訂作業と費用を要するため、インターネットサイトの「広島がんネット」と共に利用されるのが望ましいと考える。また、今後の有用な利用促進を検討するために、利用者・医療者双方に対して、その目的・活用方法等についての啓発活動やアンケート調査の実施も必要と考える。

E．結論

「がん患者さんのための『地域の医療情報』サポートブック（患者必携　地域の療養情報広島版）」は、国立がん研究センターの試作版「がんになったら手にとるガイド」、「わたしの療養手帳」、「地域の療養情報」を参考に製作したことから掲載情報の一貫性を持ちながら作成できたと考える。また広島県が中心となり、がん患者支援部会という場で、患者（支援）団体の意見を聞きながら作成にあった。行政だけでなく患者・家族からのニーズに基づいて情報提供を行っている医療者や患者・家族の意見を反映した情報提供ツールができたと考える。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表
1．論文発表
なし

2．学会発表
なし

H．知的財産権の出願・登録状況
1．特許の取得
なし
2．実用新案登録
なし
3．その他

資料1

広島県がん対策推進協議会 第１回がん患者支援部会　議事録

１　日　時　平成２２年9月１３日（月）１９：００～２０：４０

２　場　所　県庁北館２階　第１会議室

３　出席者

氏　名	所属及び役職名	氏　名	所属及び役職名
荒木　康之	社団法人広島県医師会 常任理事	佐々木　佐久子	広島がんサポート　理事
岡崎　仁史	広島国際大学医療福祉学部長	津山　順子	県健康福祉局保健医療部長
影本　正之	広島市立広島市民病院 副院長	原田　仁美	県立広島病院地域連携科 看護師長
高野　亨	がん患者支援ネットワーク ひろしま　理事	山内　雅弥	中国新聞社　論説副主幹
佐伯　俊成	広島大学大学院 総合診療医学准教授	篠崎　勝則(※)	県立広島病院臨床腫瘍科 主任部長

※　オブザーバー

４　議題

【報告事項】

広島県がん対策推進計画（アクションプラン）の進捗状況等について

【協議事項】

患者必携「地域の療養情報」の作成について

５　担当部署　広島県健康福祉局保健医療部医療政策課がん計画推進グループ

ＴＥＬ（０８２）５１３－３０６３（ダイヤルイン）

６　会議の内容

【部会長選任】

委員の推薦により岡崎委員が部会長に推薦され，了承された。

【報告事項（資料１～２）】

部会長

事務局から広島県がん対策推進計画（アクションプラン）について進捗状況の報告があった。御意見などあったら発言願いたい。